

## 口頭発表「学校飼育動物を支援する獣医師会」

～子どもたちの笑顔のために獣医師としてできること～

泉本 桂子



### 1 福井県獣医師会が学校飼育動物モデル校を始めた経緯

福井県獣医師会では平成14年度より学校飼育動物支援事業として学校飼育動物委員会を立ち上げた。そして会員達の協力のもと、学校飼育動物の治療、飼育相談等を行い、さらにこの委員会のメンバー達で、学校からの依頼に伴い「動物とのふれあい教室」、「命の授業」を行っていた。

しかしながら、このような支援体制を整えても福井県下の小学校で動物飼育が広がらず

平成18年の調査では学校数に対する飼育学校の割合は32.2%と非常に少なくなっていた。

飼育頭数の激減の背景には「鳥インフルエンザ」のような感染症の問題も大きく関わっていると推測されたが、学校の先生方の動物飼育への壁の高さもあるのではないかと推測し、私達委員会では学校の先生方対象の講習会を開催することにした。

この講習会では、学校で動物を継続飼育することのメリット、学校で飼育するのにふさわしい動物の紹介、飼育に適さない動物の紹介、飼育動物の日常の世話等を実践した。

講習会は2年で計3回ほど場所を変えて行った。

また、このような講習会を行ったきっかけとして、平成20年の学習指導要領の改訂も大きくかかわっている。



飼育対象のモルモット

平成20年学習指導要領の改定で、平成23年度から「小学校1、2年生の生活科で動植物の継続的な飼育栽培」が盛り込まれた。

「継続的な飼育」である。

同時期に委員会のメンバーからの発案で「優しさあふれる福井っ子の育成」の一つとして県と獣医師会が協力、学校飼育動物モデル校を行うことが決定、平成23年度から行うことになった。

### 2 学校飼育動物モデル校の開始

初回のモデル校は6校。

モルモットの購入代、飼育ケージ、エサ代等は無償で提供し、モルモット飼育開始時に獣医師が学校へ出向きモルモットの特長、世話の仕方、を直接子どもたちに話に行く事とした。また、各学校に担当獣医師を置くこととした。

飼育するモルモットはSPF個体（主要病原体のいない個体）。SPF個体を導入

する事で保護者の動物に対する不安を取り除くこと、給食関係者の不安を取り除くことを目的とした。

そして、小学校へ渡す前に動物病院で人の手に触れることに慣らすことも行った。

このように万全の体制を整えて小学校へ連れて行くことで、動物と子ども達の関係、学校側と獣医師側の関係、が良好な状態で動物飼育が始まった。

学校へ出向くと子ども達が期待いっぱいの笑顔で出迎えてくれる。あまりの興奮のため、子ども達に囲まれてしまう事もあったが、モルモットは「怖がりの動物」という事を伝えると、「怖がらせないようにするにはどうしたらいいだろう。」とすぐに考えてくれる場面もあった。飼育の話に熱心に聞く子ども達が、獣医師側の指導も熱心なものにしてもらえる場面が多々あった。

今回のモデル校の大きな目的は「優しさあふれる福井っ子の育成」であり同時に「学校での動物の適切な飼育」「学校と獣医師との適切な関係のモデル」でもある。

学校と獣医師会が飼育当初から連携することによって、学校の先生方の負担を軽減、困ったことがあったら相談、という体制を行いやすいものとした。

金銭面、飼育面双方の負担を獣医師会がカバーし、動物飼育のいい面を最大限に引き出してもらって体制を整えた。学校側から希望があれば保護者参観日に合わせて訪問も行うことも伝えた。



モルモット導入授業：世話のしかた



モルモット導入授業：だっこのしかた

### 3 定期的なケアー

飼育が開始されると、名前を付けることから始まり、学校中が大いに盛り上がるようである。週末の持ち帰り（学校へ置き去りにしない事を最初に伝えているので）や長期休みの対応等が質問されることも出てきた。

週末の持ち帰りは各学校で様々で、各学校の担当獣医師が学校にあったアドバイスするようにしている。

季節の変わり目、夏休み、冬休みには手紙を出して飼育アドバイスをを行うようにした。

また、新年度には担任の移動や飼育学年の変更があるため、その都度学校へ出向き健康診断を兼ねて飼育方法の授業を行うようにした。

さらに、日々使うエサも担当窓口動物病院から手渡しすることになっている。このことで元気でも2か月に1回の割合で学校の先生に会うことができ、動物の様子を把握することができている。動物病院に来た時の些細な会話でも飼育の負担を軽減することに役立っていると感じる。

上記のような支援を行う代わりに、小学校には毎年獣医師会主催で行っている動物愛護フェスティバルへ動物飼育実践発表として、パネルを作成してもらっている。

### 4 調子が悪くなった時：モルモットが亡くなってしまった時

毎日飼育していると、わずかな体調の変化にも子ども達が気づくようになる。「いつもより食欲がない」「うんちの量が少ない」等を主訴とし、来院したモルモットはそのまま入院することが多い。完全草食動物のモルモットは体調不良が

表面に出るとなかなか治りにくく治療にはかなりの労力を要する。体調がよくなれば、内服薬を処方し退院する。内服薬を躊躇されることもあるが、内服薬を投与するのが得意な子ども達もいる。飼育だけでなく、投薬を行う事で生き物に対しての理解も深め<sup>07-08</sup>ができる。



投薬中のモルモット

しかしながら、治療を行っても残念ながら、飼育開始数か月で亡くなってしまったモルモットが2頭あった。

亡くなった時、獣医師が学校へ訪問、治療経過の説明や死亡原因について子ども達への説明を行った。

そして子ども達へ獣医学的な説明を行い、「喪の授業」を行った。



喪の授業の様子

初めて学校へモルモットを連れて行った時と、子ども達は全く表情が異なったが、死因についての説明を真剣に聞いていた。泣き崩れてしまう子ども達もいた。毎日一緒の時間を過ごし、大切に飼育していた子ども達だからこそ流す涙だった。

亡くなってしまったモルモットは、校庭の片隅の小さなお墓から児童たちを見

守っている。

飼育導入時の世話から埋葬までお手伝いすることで今回のモデル校事業の2校は完結となった。

## 5 モデル校実施、継続飼育で得られるもの

今回のモデル校の大きな目的は「優しさあふれる福井っ子の育成」「生活科の継続飼育に対しての適切な飼育のお手伝い」

「学校での動物飼育の推進」である。

教室内で子ども達が動物を適正飼育することで、優しさ思いやりが芽生え、生きていることの素晴らしさを学んでいく。

私達獣医師は、子どもたちへの分かりやすい説明を心掛け、学校の先生方の負担軽減について模索し、いかにいい形で協力できるかを考え続けている。負担の軽減により福井県下の小学校全てで動物飼育がおこなわれることを目標としている。

また、これは言うまでもないが、獣医師として更なる動物治療の向上も心掛けている。

モデル校の実施後、モデル校に準じる形で動物飼育が少しずつ増えている。また、新たな動きとして地元の教育委員会が動物飼育の趣旨を理解し、予算を出し町内すべての小学校で飼育を開始した町も出てきた。獣医師会にしか行えない支援は継続し、飼育に関わる費用は教育委員会で負担する体制が整った。

これはモデル校を行った大きな成果であった。

最後に、モデル校の実施後数か月でモルモットの死を経験した小学校は、再び動物飼育を行っている。子ども達から担任へ「大切に育てるのでまた動物を飼いたい」という強い希望があったから、と聞いている。

「飼育に関わる煩わしい事を獣医師がフォローすることで、学校では飼育で育まれるいい影響を最大限に引き出してもらいたい。」と考えている。

「目的を持ち、大切に飼育された動物達」は亡くなった後も、子ども達を大きく成長させてくれるようだ。





死を乗り越え再び動物飼育を開始した小学校の様子

福井県獣医師会での活動は立場の異なる獣医師が集まり，共に活動している．これにより手厚いフォローができていく．今後もいい形で動物飼育を継続してもらうために委員会で知恵を出し，活動

していきたい．まだまだ課題は多いが，獣医師として学校教育に関われ，子ども達の笑顔のために協力できることの素晴らしさを感じる毎日である．



福井県獣医師会の学校飼育動物支援委員会のメンバー  
(公益社団法人福井県獣医師会  
／わかさ動物病院)